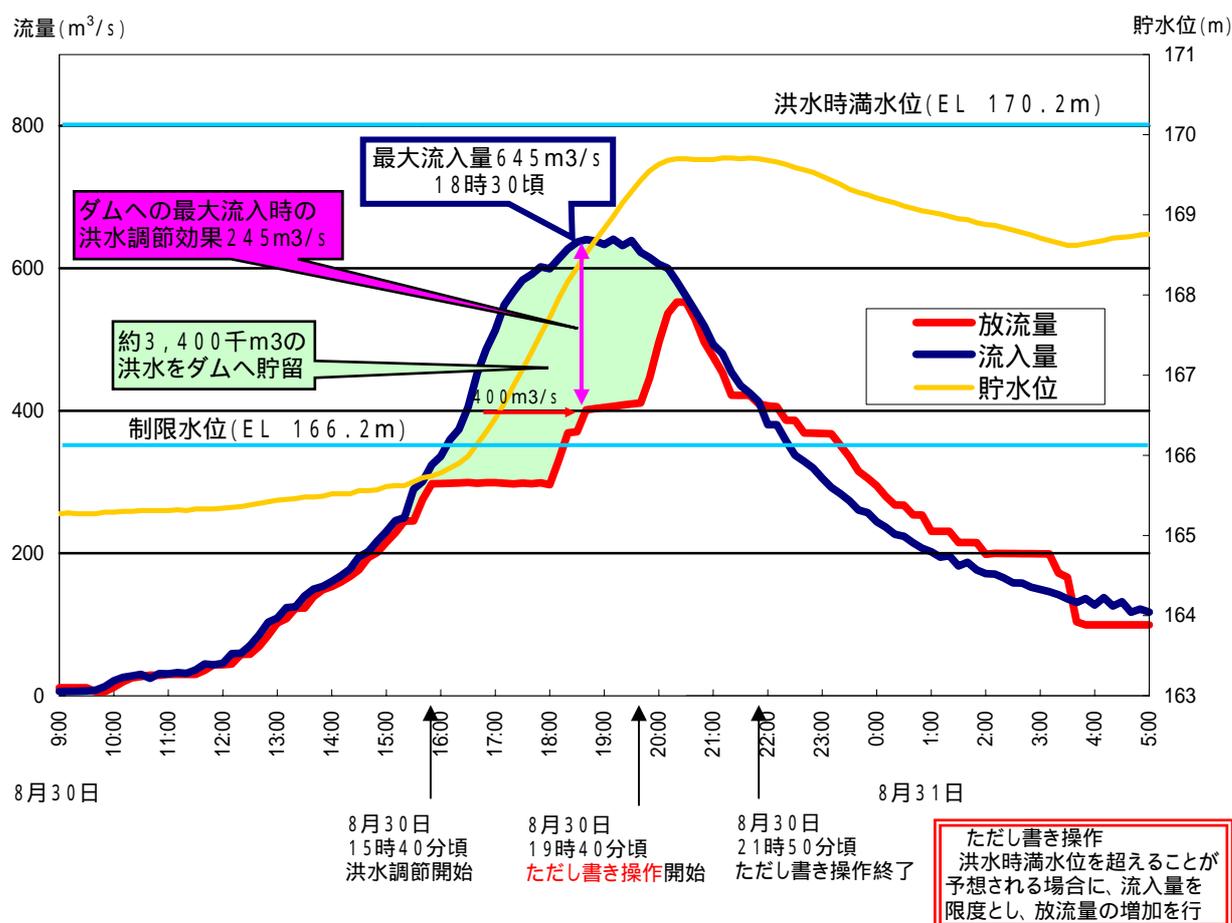
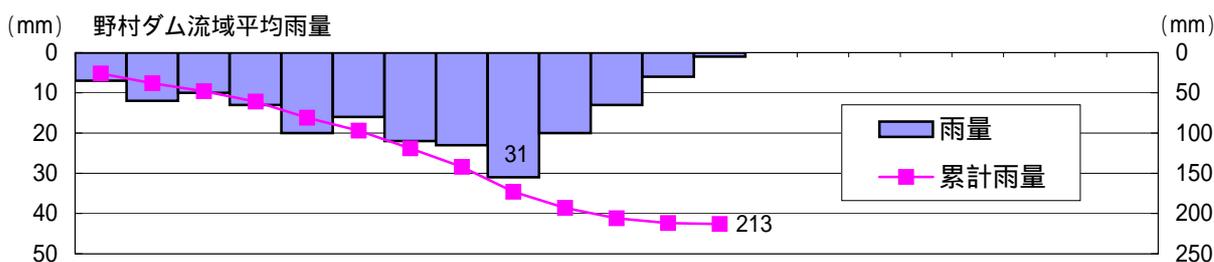


# 平成16年8月30日(台風16号)における野村ダムの洪水調節効果

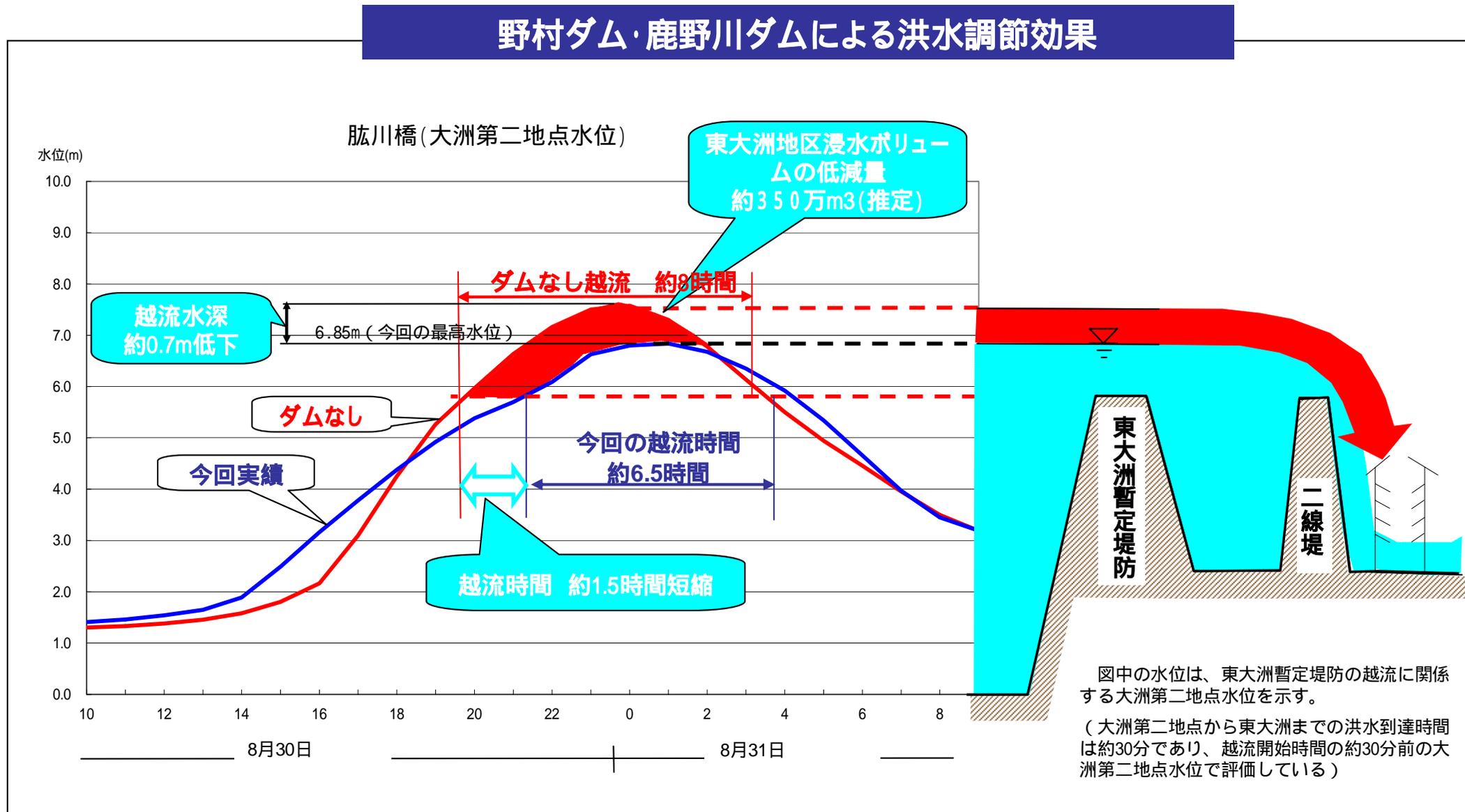
肱川水系肱川においては、野村ダムで245 m<sup>3</sup>/s  
 (最大流入量645 m<sup>3</sup>/s 放流量400 m<sup>3</sup>/s)  
 を調節しており、約3,400千m<sup>3</sup>の洪水を貯留し、  
 下流の水位低下に寄与。

野村ダム諸元(洪水期)  
 総貯水容量 : 16,000千m<sup>3</sup>  
 洪水調節容量 : 3,500千m<sup>3</sup>  
 利水容量 : 9,200千m<sup>3</sup>  
 堆砂容量 : 3,300千m<sup>3</sup>

注)本資料に関する数値は速報値であるため、精査の結果変更もあり得ます。



# 1) 既設2ダム(野村ダム・鹿野川ダム)の洪水調節効果



野村ダム・鹿野川ダムでは合計で約2,040万m<sup>3</sup>の水を貯めて、鹿野川ダムから河口まで全川にわたり水位を低下させました。基準地点大洲(肱川橋)の流量を約700m<sup>3</sup>/s低減させ、約0.7mの水位低下を図りました。

また、東大洲地点の暫定堤防からの越流氾濫量を大幅に低減させ被害を軽減しました。